

大琉球写真絵巻 パート1

2014

- ウミンチュ（漁師）が魚をいっぱい釣って来た。（琉球國時代）
- イモの収穫。豊作を喜ぶハルサー（百姓）。（琉球國時代）
- 「薩摩よ、来るな!」。祈るカミンチュ（神人）。
- 1609年3月、徳川幕府から「琉球征討」を許された薩摩藩が3,000人の軍勢で琉球に侵略。奄美群島を次々に征服。4月に首里城を占拠。琉球は降伏した。薩摩藩は幕府から琉球の支配権を承認され、奄美群島を割譲させ直轄地とした。琉球國は薩摩の支配を受ける一方、中国との冊封（王の承認）・進貢（中国皇帝に貢ぎ物を献上）関係が続いた。
- 「琉球処分」。1879年3月27日、明治政府の処分官・松田道之が軍隊や警察など約560人を率いて琉球へ。首里城で「琉球藩を廃止、沖縄県とする」と布達。500年に及ぶ琉球國は崩壊し、日本に併合、沖縄県となる。国王尚泰は東京在住を命じられた。
- 琉球の元役人たちは島ぐるみで抵抗運動が続けたが、逮捕され拷問を受けた。明治政府による琉球人への徹底弾圧は1894年の日清戦争まで続いた。
- 謝花昇は元薩摩藩士の県令（県知事）・奈良原繁と対立。役人を辞めて明治政府と県令に対抗し、民権運動の中心人物に。1901年、旅先の神戸で発狂し、その後病死した。
- 1944年3月、沖縄に日本軍第32軍創設。以後、南西諸島に約143カ所の慰安所が設置された。沖縄人、日本人、朝鮮人、台湾人の慰安婦は全体で推計1,600人前後いたという。
- 沖縄戦。1945年3月、米軍がはじめて慶良間諸島に上陸。4月、本島に上陸。沖縄人の多くが家族を殺された。捕虜収容所に入れられている間に、家や田畑は米軍基地として強制接収され、集落ごと移転させられた。
- 沖縄戦。1945年6月、糸満の摩文仁の海岸まで米軍に迫いつめられた日本軍。県民の4人に1人が殺される悲惨な戦争だった。
- 沖縄戦。1945年6月、米軍から逃げ延びる途中で家族全員が殺され、たったひとり生き残った子ども。戦争孤児は約1,000人いた。
- 1950年代、米軍は強制的に住民の家や田畑をつぶし土地を取り上げ基地建設を進めた。「向こうに自分たちの畑がある。行かせてくれ」。懇願する農民。
- 米軍統治下の沖縄。米兵による強姦が多発。生後9ヶ月の赤ん坊から年寄りまで見境なく女性を襲った。なかには殺される者もいた。犯人の米兵は米軍により逮捕され軍裁判にかけられるが、無罪になったり逮捕されずに本国へ逃げ帰った。

記録では「処罰の方法不明」だらけ。おとがめなし、ということだ。

- 琉球國の日本への併合後、学校や家庭で同化政策が進み、ウチナーグチ（沖縄語）が禁止、「標準語」を話すよう教育された。それは1945年の敗戦後も継続、「方言札」は1960年代まで続いた。
- 「沖縄の祖国復帰を願う平和行進団」がやってきた。学校で教師が日の丸の小旗を生徒に持たせ、沿道で行進団を出迎えた。
- 「落ちる、危険だ」といわれる輸送機オスプレイを、米軍普天間飛行場のフェンスに隣接する民家の屋根に落としてみた。パイロット役は演芸集団 FECで「お笑い米軍基地」の脚本を担当する小波津正光さん。基地の中にオスプレイの格納庫が見える。
- 2013年11月、自民党本部。「米軍普天間飛行場は県外へ」と公約して当選した沖縄の国会議員5人を従え、辺野古移設で（5人と）合意したと記者会見する石破茂幹事長。
- 2014年1月、名護市長選で「自民党が推す候補者が勝ったら、500億円の名護振興基金を新設します」と、名護市民にカネをちらつかせた石破茂自民党幹事長。防衛省の辺野古埋め立て申請を許可した仲井眞弘多知事に「不承認」をつきつける、再選された稲嶺進名護市長。「違法な反対運動の妨害活動に警察と海上保安庁の積極的な対応が必要」と、島尻安伊子参議院議員が国会で政府に要求。
- 名護市の米軍基地キャンプ・シュワブ沖合に、県民の反対を尻目に新基地建設に向け防衛省が工事を強行中。
- 安倍晋三首相が憲法9条を無視し、国会での議論もなく閣議決定だけで「集団的自衛権」を推進。
- やりたい放題、いいたい放題。沖縄にどんどん基地を押しつける安倍晋三首相と石破茂幹事長を、沖縄人が魔よけのシーサーを先頭に追い出そうとしている。（名護市辺野古の浜にて）
- 「沖縄に災いを持ってくるな〜!」と、日本に向かって祈るカミンチュ（神人）。

*本作品解説は、石川真生自身の言葉による。2021年に沖縄県立博物館・美術館で開催された展覧会「石川真生展：醜くも美しい人の一生、私は人間が好きだ。」図録内のインタビュー、及び2023年に東京オペラシティ・アートギャラリーで開催された「石川真生 私に何ができるか」ハンドアウト（執筆／天野太郎）から引用した。

出典：「石川真生インタビュー」『醜くも美しい人の一生、私は人間が好きだ。石川 真生』T&M Projects、2021年、pp. 6-12 インタビュアー：亀海史明（沖縄県立博物館・美術館学芸員）、趙純恵（福岡アジア美術館学芸員）、中村史子（愛知県美術館学芸員）収録：2020年7月9日、30日、8月27日、9月23日 構成：亀海史明

TITLE

ライフ2
すべては君の未来

DATE

2024

10.5[㊥] / 12.8[㊦]開館時間 10:00-20:00（展覧会入場は19:30まで）
休館日 火曜日

石川真生《沖縄芝居 仲田幸子一行物語》1977-1992

熊本市現代美術館

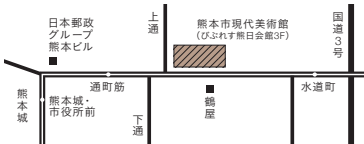
Contemporary Art Museum, Kumamoto

ART KISS LETTER Vol.115 (2024年10月)

編集：坂本順子

発行：熊本市現代美術館 www.camk.jp

〒860-0845 熊本市中央区上通町2-3 Tel 096-278-7500



写真家・石川真生による作品解説

1. 赤花 アカパナー 沖縄の女 1975-1977

黒人に対しての先入観がなかった。イタリア系アメリカ人の叔父さんがいい人だったから、米軍の犯罪は憎かったけど、米兵一人ひとりに恨みはなかったよ。あのときから米軍と米兵個人のことは自然と分けていたと思うよ。黒人兵と同棲している当時、米軍が放送して流行っていた「ルーツ」というテレビドラマがあったわけ。奴隷で連れてこられた黒人の歴史についてのドラマで、こんなに酷かったんだ、沖縄の歴史と黒人の歴史は重なるところがあるな、と思ったよ。沖縄対ヤマトと、黒人対白人というように。

最初、黒人パーを選んだのは琉球新報の記者の紹介だったけど、もし白人パーを紹介されていたら、白人を撮ることになっただろうし、米兵であればよかったんだよ。結果的に黒人パーを紹介してくれて、自分と合ったからよかったなと思ったよ。

2. 沖縄芝居ー仲田幸子一行物語 1977-1992

テレビで仲田幸子さんが娘と一緒にボーク缶詰の宣伝に出ていたの。それで、この人おもしろそうとピンときたわけ。夫と一緒に、沖縄芝居を観に行ったのよ。ウチナーグチの芝居で、言葉がわからなくても笑えたわけよ。その当時、私はウチナーグチをあまり理解できなくて、聞くのは少しできるけど、喋ることはできなかった。私のようにウチナーグチを喋れない、聞けない年代がどんどん増えた時代だった。

庶民をモデルにした芝居だから、観客にとっては自分や自分の親しい人たちの話でもあるわけよね。観客と演劇する人の距離が縮まって、自分の家族の物語を見ているような感じ。それで、次の芝居にひとりで観に行ったら、座長の仲田幸子さんに「写真を撮らせてください」と頼んだら、「いいよー、いつでもうちにおいで」と言ってくれた。写真集には、座長の幸子さんと夫の龍太郎さんと孫の正江とマイクが夜寝ている場面もあるのよ。座長が布団を蹴飛ばして太ももを出している。龍太郎さんに「出しても大丈夫ですか?」と聞いたら、「真生がやっていることだから大丈夫」とオッケーしてくれたんだよ。

- 2-1 仲田幸子 (1933-) 劇団でいご座座長。三枚目が当たり役 1978年頃
- 2-2 南風原町 (津嘉山公民館) 1981年6月
- 2-3 子役で出演する明美の娘・正江 (6歳)。南伸一 (右)、故・神山恒夫 (中) 与那原町 (与那原農協ホール) 1978年3月
- 2-4 与那原町 (大見武区公民館) 1978年4月
- 2-5 ああ、本当に旅回りの一座なんだな〜と思った。嘉手納町 (嘉手納琉映) 1979年11月
- 2-6 満員の客席。南風原町 (津嘉山公民館) 1981年6月

3. 港町エレジー 1983-1986

男たちは、中学卒業してすぐ働いている人たちが多かった。家が貧しいとか、いろいろな事情でね。ウチナーグチしか喋らない人が多かったんだけど、それがさ、すぐ生っぽくて、正直者で、乱暴者で、でも優しいというのが全部入っていて、いわゆる人間臭い人たちがったの。哀愁も感じるわけよね。

くっついて行って撮るということが、仲田幸子さんのときもそうだし、〈港町エレジー〉のときもそうだし、いちいち演出しなくていいわけじゃない。そこには芝居以上の芝居があって、私にとってはすごくおもしろい世界でさ。自分がその世界に住んでいないからこそおもしろい世界。自分の好きなように生きて、好きなことを言って、好きなように行動する人たち。両方ともすごいプライドの高い人たちがったからさ。自分がやっていることに対して、全然卑下していないかったよ。

私は人を撮るとき、誰にでもプライドがあるからそれを傷つけないように、ちゃんと相手をリスペクトして、撮っているんだけど、ふと、私はひょっとしたらこのおっさんたちを舐めて見ているときがあったかもしれない。ひとりのおっさんが酔っ払っているときに、ピッと真顔になって、「俺たちにも人生があるんだよ」というセリフを言ったからさ。ドキッ!とした。それから再び襟を正してちゃんとこの人たちを尊敬してきっちり見て撮らないといけないと思ったわけ。男で言えばフンドシを締め直したということだね。私は女だから、パンツを履き直した?というところかな (笑)。

私はしつこく同じ人たちを撮り続ける。年月がたてば自然と相手の緊張がとれて私を意識しなくなる。何度も撮るうちにいろいろ見えてくる。人間は醜い面も美しい面もある。嘘も言うし、本当のことも言うし、優しさもあれば、暴力的なところもある。それもひっくるめて人間だから、そんな裏表を全部見たいと私は思うのよ。だから私は、相手が私が撮っていると見える距離でしか撮らない。隠れて撮るなんてやらないわよ。

4. ヘリ基地建設に揺れるシマ 1996

あの頃は、橋本とクリントンが握手して、普天間飛行場を返還しますと宣言して、沖縄の人はパンザーイ!と喜んだよ。そしたら、舌の根も乾かぬうちに「でも、代替基地は沖縄県内に造ってもらいます」と。これ、詐欺じゃない?ただ宜野湾から名護に移るだけさね。辺野古は結構保守的な区で、区の偉い人が受け入れたからね。もちろん反対する人もいて、その人たちが真っ先に立ち上がったわけ。ちょうどいいことに、私のばーちゃんは、辺野古の近くの瀬嵩 (せだけ) という部落の出身で、私はばーちゃんの親類を頼って辺野古に入ることがスムーズにできたのよ。私は賛成派と反対派の両方に知り合いも親類もいるから、結構図々しく入っていったんだよ。一方的に聞くマスコミみたいに辺野古の人を緊張させるん

じゃなくて、私は自分の意見もはっきり言って、相手とキャッチボールするから、相手も自分がどんな人かわかるからより仲良くなった。それで「命を守る会」結成会のときに、写真を撮ったのが、唯一私だけだったわけ。そうしたらマスコミがいっせいに動き出したよ。初めて気づいてお前ら馬鹿か?と思ったよ。ただ私はニュースネタを出したいのではなくて、この連載だって、人間ドラマを出したわけ。いろんな人の思いをね。

- 4-1 旧暦3月3日、地域住民に基地を開放。名護市 (キャンプ・シュワブ)、2002年4月
- 4-2 嘉陽宗義さん (右) と金城正登喜・美重子さん夫妻。民間地域とキャンプ・シュワブの境界にバラ線が敷いてある。名護市辺野古、1997年1月15日
- 4-3 目の前が真っ暗になったので病院で診察を受けたら即入院。九死に一生を得た嘉陽芳子さん (71歳)。ホッとした夫の宗義さん (76歳)。「これ以上の僕の宝はない。これ (芳子) を奪うなって!」と妻を抱きしめた。沖縄市 (中頭病院) 1997年4月15日
- 4-4 魚つりや潮干狩りに行く人々のために船を出す仕事をしている島袋利久さん (44歳)。ヒサ坊の愛称で呼ばれる「辺野古で一番の有名人」。名護市辺野古沖、1997年5月12日
- 4-5 「クリスマス・チルドレンズデー」に辺野古の子どもたちを招待。名護市 (キャンプ・シュワブ)、1999年12月
- 4-6 「辺野古ハーレー」に参加したキャンプ・シュワブの米兵たち。民間区域 (辺野古) と米軍基地の砂浜を区切るフェンス (鉄線) をヒョイとまたいで帰っていった。米兵だけが通れる。名護市辺野古、2000年5月28日
- 4-7 「命を守る会」の結成 (1997年1月) 当時からずっと先頭になって反対運動を引っ張ってきた金城祐治 (1935-2007) さん (65歳)。疲れたり思い悩む日だってある。名護市辺野古、1999年10月18日

5. 沖縄芝居ー名優たち 1989-1992

はじめは「仲田幸子一行」を14年間撮った。撮影が終わりに近づく頃、ちょうど戦前から活躍していたプロの沖縄芝居の役者たちが次々に年をとって、亡くなりはじめた時期だったのよ。そこで初めて、他の劇団の役者もいま撮らないといけない、と使命感、義務感に駆られてさ。主役クラス、端役、地諾 (三線太鼓)、など芝居に関わっている人たちの7割、8割は撮影したんじゃないかな。

- 5-1 大宜見小太郎さん
- 5-2 兼城道子さん

6. 大琉球写真絵巻 2014-

『大琉球写真帖』も、「大琉球写真絵巻」も、特別有名な人が出ているわけではなく、庶民の歴史。普通の人たちがどう動いているか、私が興味を持った人しか出していないわけ。王朝の人たち、偉い人たちだけとか、名のある政治家だけで作っているわけではないからさ。絵巻のパート1は、琉球国に薩摩が乗り込んでくる直前から撮ろうということで、創作写真だったの。ところが撮る時代が近現代に入ってきたら、私が出したいと思う個人が出てきたわけ。それで個人に頼んで、自分で自分を演じてもらった。私は右向いて、左向いてという微調整しかしていないの。パート7は、このシリーズでは初めて宮古島、石垣島、与那国島で撮ってきたけど、個性が強い人たちがいっぱい出て演じてくれたの。ただ私はこだわりのあって、1点でもいいからできるだけ沖縄戦のことを出す。もうひとつは、従軍慰安婦にさせられた人たちを出したいということが強くある。ただ私が他のものを入れてしまったために、それが出せる年と出せない年があるけれどもね。ふたつのテーマは意識している。そこが私の原点だからさ。創作写真ではあるけれど、ドキュメンタリー的にその人を撮っているものもある。計画を立ててやることはなくて、むしろ、未来にどういう人に会うかということを楽しんでいるものが多い。動いていたら、必ず出会いはある。そういう方がずっとおもしろい。



大琉球写真絵巻 パート1

11



ヘリ基地建設に揺れるシマ

4-3